
一本の傘。

augusu

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
一本の傘。

【Nコード】
N6097Z

【作者名】
a u g u s u

【あらすじ】
ショートショート。。

今日も雨だった。

二日続けての雨。

彼女は言う。

「こんな天気が続くなんてうんざり」と

彼女はバリバリのキャリアウーマンで。

僕は彼女のような年代の女性はやれ新宿とか、渋谷とか言って遊ぶのが常識だと、彼女と付き合うまで信じていた。

彼女は下町が好きだった。そこに一軒の揚げ物屋がある。

コロッケが大好きだった彼女は、その店で買ってすぐに食べ歩くのが好きだった。

「やっぱり傘差して、行こうかな」

「それなら僕も付いていくよ」

僕はそう言っ先を少し歩く彼女差す傘を見る。
すると彼女はその傘から笑って、

「いいわ。また晴れた日にするから」
とだけ言った。

それからしばらくして、僕らは別れた。

少しずつ離れていく僕らの距離の理由が、どういつものか良く分か

らないうちに、
どういう理由があつて付き合っているのかも、分からなくなってしまったのだ。

「新しい住居からじゃ、少し遠いかな」
彼女は最後の荷物を取りにきた時、そう呟いた。

「だったら、また」
「ダメよ。決めた事でしょ？」
彼女はそう言つて微かに泣いて出て行つた。

ある時あの店の前を歩いていると、彼女がいた。
雨の日だった。

彼女は男の人に傘を差してもらい両手でコロッケを頬張っていた。
その時気づいた。

彼女が求めていたのは、雨の日に付いて来てくれる人ではなくて、
コロッケを両手で食べていても雨に濡れない、
大きな、一本の傘だったのだ。

コロッケをほお張る彼女と肩がくつつくほど近づいている二人の距離が、
僕と彼女の、埋められなかった距離だったのだ。

（後書き）

あなたの傍に、空いている距離はありませんか？

感想などお待ちしています

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6097z/>

一本の傘。

2011年12月20日15時51分発行